

BOOK REVIEW

わくわくの科学伝記

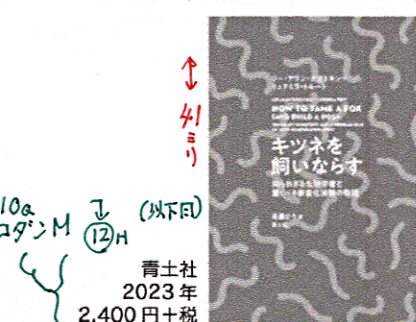
『キツネを飼いならす—知られざる生物学者と驚くべき家畜化実験の物語』

リー・アラン・ダガトキン、リュドミラ・トルート 著 / 高里 ひろ 訳

野生動物は、ヒトを見ると攻撃するか逃げか、そのどちらかしかない。尻尾を振りながら甘えた声を出して見つめてくるのは、ヒトに飼われる家畜とペットだけである。その最大の特徴は、ヒトに慣れて従順であること。それだけでなく、白やブチ柄が多く、垂れ耳、クリクリの大きな目、丸い鼻、巻いた尻尾など、野生では何の役に立たなさそうだが、ヒトが見てかわいいと思う風貌も、共通している。進化の過程で、ヒトに可愛がられる外見を身につけたのかもしれない。それに、野生動物の繁殖期は短いのに、家畜は長い。敵に襲われることも食餌に困ることもないので、いつ子どもが産まれてもよかったのかもしれない。

キツネを飼育しても、凶暴で、ヒトに懐くことはない。ところがそのキツネを飼いに慣らして家畜化しようという表題に惹かれて、本書を手にとった。毛皮を売って大儲けしようとしたら、やっぱ駄目で失敗だったという話かと思っていた。ところが実は遺伝学の話で、牧場の話ではなかった。その予想は外れたのだが、面白さは大当たりであった。実に濃かった。十代の頃に読んだワトソンの『二重らせん』で、DNAの構造を突き止めようとする科学者たちの先陣争いが面白かったのを覚えているが、そのときの感動を思い出した。

本書は、冷戦真っ只中で、西側の情報が入らない東側の話である。学問の自由もなかった。そんな状況でも、信念をもった優秀な遺伝学者が壮大な実験を計画した。イヌは、何万年もかけてオオカミから進化した。しかし、その家畜化の過程や仕組みや理由は、想像はできても詳細は明らかではない。そこで、キツネを



飼いに慣らすことで、その謎を解こうというのだ。実験計画は単純でわかりやすい。キツネもほかの生き物と同じで、個体ごとに個性がある。よく観察していると、凶暴さがまだましな個体がいる。そんな個体を選んで交配を重ねると、またさらにおとなしい個体が現れるだろうと予測した。そんな地道な作業を繰り返すことで、まるでイヌのようにヒトに尻尾を振るキツネになるのではないかと考えたのだ。思いつくのもすごいが、この実験を何かと不自由な国で実行したのだから、またさらにすごい。政治的迫害を避けるためにいくつもの手段を慎重に講じ、信用できるだけでなく根気強く観察と記録を続けられる遺伝学者も集められた。記録といってもエクセルやデジカメではなく、紙とフィルムの時代である。

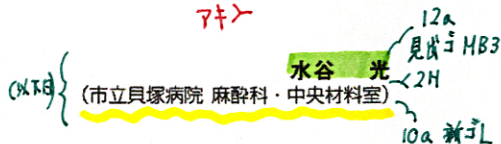
実験してみないと結果はわからない。キツネは1年で大人になるので、1年かけて一世代しか実験は進まない。何年どころか何百年もかかるかもしれない。イヌのように何万年もかかるかもしれない。あるいは、永遠にイヌのようににはならないかもしれない。ところが、である。わずかな年数で、まるでイヌのようにヒトに尻尾を振る個体が生まれたのである。なんとということだ。ネタバレを書いてし

まったが、本書の真骨頂は、その長年にわたる実験の過程で繰り広げられるはらはらどきどきの物語にある。ぜひ堪能していただきたい。

そしてさらに、驚きの事実が続く。凶暴ではない性格の個体を選んでいただけで、外見や解剖学的な特徴では選んでいない。ところが、である。従順で人懐こい個体は、目がクリクリで、鼻先が短く、いかにも可愛らしいというのだ。さらに、繁殖期まで変化してきた。こうして、謎だった家畜化の一端が解き明かされてゆく。今は、進化や遺伝といえど即ゲノムの話になるが、本書の研究が始まったのは二重らせんが発見されてすぐの、まだ分子生物学が花開く前で、遺伝子操作の発想すらない時代である。

先月号の本欄で紹介した『世界は進化に満ちている』の読後すぐに本書を開いたことに、理由はなかった。ところが偶然にも、読む順番はちょうどよかった。前書で進化や遺伝の研究の最先端を垣間見ていたおかげで、本書に登場する遺伝学者が追い求める真実の理解が助けられた。実に面白かった。もちろん、この前書を読んでいなくとも、本書は楽しめるだろう。意図せず、関係書を読んで読む楽しさを堪能する幸運に恵まれた。

残念ながら、表紙の模様の意味を書評子には理解できていない。何か意味があるのだろうか。装丁家には申し訳ないが、本書の驚きの物語とは合わないように思う。英語版の表紙は賢そうな白キツネの顔写真の大写真で、これでよかったのではないだろうか。



門松は冥土の旅の一里塚 めでたくもありめでたくもなし (一休禪師)

『最後の火を灯す者—火葬場で働く僕の日常』第4巻

下駄 華緒 原案、蓮古田 二郎 漫画

新年早々に（一休禪師にない、あえて）紹介する本書は、火葬場で働いていた青年の経験をもとにした漫画で、2021年9月の第1巻以来、巻を重ねての第4巻に相当する。続く第5巻は2025年11月に刊行の予定だというのが、本書評執筆時にはまだ世に出ていないので、2024年刊行の本書を評することにした。

本書は、世に知られることの少ない仕事の、いわゆる“内幕もの”である。火葬場はヒトなら誰しも一度は必ずお世話になる（そして二度目はない）ものの、めったに行くところではないし、死体を焼くという、ややもすると忌まわしくとられがちな仕事は、怖いもの見たさの関心が寄せられるが、当事者としてはうるさくいわれる（炎上か。火葬場の炎上では洒落にならない）のを避けるために、隠匿しがちである。それゆえ、本書はよくぞここまで公開したものだと感心する。

手術麻酔に従事していると、死亡診断書を書く機会はまずないが、救命救急に従事していると、死亡診断書の記載、すなわち個体の死に直接かわる機会が多い。そして個体の死をめぐる関係者の軋轢は、生前同様に火葬場でもやはり繰り返されているようだ。家族・親族の間でも故人に対する感情は異なるし、あまりにも強い感情、特に憎悪の混じっている場合には、ヒトがその原型をとどめなくなったときに露骨に表現されることがある。本書評では詳しい内容には立ち入らないことにするので、関心のある方には一読を勧めたい。

本書を読んで気になったので調べてみると、東京23区内では公営の火葬場は2か所、炉数にして30台であり、残りの7か所（炉数76台）は民営なのだ



いう。施設の性格上、新設はきわめて困難と思われるので、東京のように多くの人が亡くなってゆく地域では火葬も渋滞することになる。大震災で一挙に多数の人が死んだ神戸では、火葬職人らは連日、長時間の作業で大変苦労したらしい。となると分散搬送に対応する（ヨソ者の死体はイヤだという縄張り根性がないと希望して）か、冷凍長期保管ということになるだろう。東日本のときは、用意が悪かったのか、他地域との連携がうまくいかなかったのか、それとも遺族らが遠方への移動を嫌がったのか、理由はわからないが、宮城県の場合、2018体の遺体を一時的に埋葬し、後に掘り出して火葬するという方策がとられた。

米国は土葬が主であるが、冬に死んだため土が凍っていて埋葬できないという状況を映画で観たことがある。重機を使えば墓穴を掘れなくはないが、騒音とか振動とかで周囲（周囲の墓の関係者？）が嫌がるという理由で、春になるまで冷凍庫で保管するというのだ。これは初耳だった。この映画では春に無事埋葬できたが、死んだ男の長男が、冷凍のチキンが食べられなくなったという副次的現象も表現されていた。

本書で示されているのは、さまざまな

遺体まつわるエピソードで、それが一篇十数ページの漫画になっている。読み飛ばせばそれまでだが、内容にちょっとこだわってみると、そこから考えさせられることはたくさんあるし、その一部は医療システムを考えると参考にもなりそう。いろいろな事例がモデルとしてでてくるが、この第4巻では風俗・習慣の異なる“外国人”のエピソードが登場した。異なる国、支配的な宗教があると、死後の手続きも一筋縄ではゆかない。大使館は日本語の死亡診断書を受け付けるのか？ いやまず市役所か？ 火葬でいいのか？ と悩んだことがある。

ネパールのカトマンズ市を流れるバグマティ川は、ガンジス河の上流にあたるが、その流れを挟むようにして、パシュパティナートというヒンズーの寺院がある。片側の岸に何か所か火葬台が突き出している。そこでは井桁に組まれた薪の上に黄色の布でくるまれた死体が置かれ、火を付けて燃やすのだが、火力源が薪なので火力は十分といえず、焼け残った遺体の一部は灰とともに川に流されるが、それを反対側の岸から観光客が眺めているのだ。ちょっと死生観が変わる風景である。

それはともかく、ネパールではこれに従事する火葬職人の成り手が少なくなつて、将来こうした伝統が維持できるかどうか不安視されているという独特の理由もあるだろうが、火葬職人の不足が懸念されることは日本国も同じだ。相当特殊な知識と技術が必要であり、調べてみると斎苑協会による「火葬技術士通信教育」講座なるものを発見した。そして国際火葬連合という組織は国連の諮問機関なのだそう。火葬場で働く人たちがいわゆるエッセンシャルワーカーであることには疑いをいれない。そしてほかのエッセンシャルワーカーにも共通して言えることだが、彼ら/彼女らに適正な社会的評価と報酬を期待するのである。

（帝京大学ちば総合医療センター）

◆ブックレビュー

※ 指定外のケイは、アタリケイです。
※ 指定外の文字は、スミベタです。

BOOK REVIEW

読甲

現代アート³⁹の歴史と その意義と展望⁴⁷

80% + 20%

『12ヶ月で学ぶ現代アート入門』

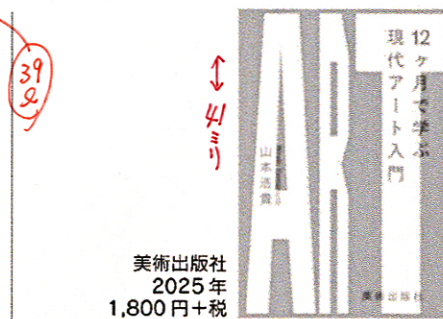
山本 浩貴 著

つい最近「瀬戸内国際芸術祭 2025」に出かけた。何しろ3年に一度の開催、アート大好き人間には見逃せない一大イベントである。

新しく建てられた直島新美術館に展示された作品もそうなのだが、この島をはじめとして、会場となった島々に展示された作品のほとんどは現代アートと称されるものである。一つひとつ鑑賞しながら、ああだこうだと考えてみるが、はたして正しく理解できたのかどうか、甚だ心もとない。現代アート展を訪れた人のほとんどに、そんな抱きながら会場を後にした経験があるのではないだろうか。現代アートには解釈は必要ない、感じたままに見ればいいと言う人がいるが、それでは癪ではないか。

やはりしっかり勉強してから出かけよう。初心者にとって役に立つ本が刊行された。『12ヶ月で学ぶ現代アート入門』。著者は山本浩貴。美学・美術史を専門とし、制作だけでなく批評や実践的な展示企画も行う気鋭の研究者である。

本書は現代アートの歴史、存在意義・価値、展望をめぐって12の問いを投げかける。が、おおまかには二つの点を特徴として述べている。一つは「アート概念の拡張」である。嚆矢は定番のマルセル・デュシャン、そして代表的な作品『泉』(1917年)を取り上げ、20世紀のアートの流れや方向を決定づけた芸術観を解説する。キーポイントは、唯美的・観想的に鑑賞する伝統的・古典的作品とは異なり、作品を前にして、芸術って何?と思わず考えさせる、難しい用語を使えば、「自己言及的」な作品が次第に主流となってくるということ。著者の表現では「形を持たないアイデア」こそ核心となる潮流が生まれ、以後アートは自らの存



在を疑い続けざるを得ない宿世をたどることになる。そのクライマックスを飾るのが「コンセプチュアル・アート」である。代表的な作家ジョセフ・コッスやローレンス・ウィナー、さらにほかの作家の作品やその根拠となる理論を紹介しながら(コッスに「芸術は概念のなかにこそ存在する」という有名なテーゼがある)、その力学を力強く紹介、解説している。現在アートのエッセンスが、既存の権威主義への不断の更新にあることを明確に主張している。

だが、本書の重心はむしろ二つ目の特徴にある。第一は美術史のおさらい的要素が強いが、第二はまさに現在の存在理由・価値に密接にかかわる新たな役割や可能性、そして展望を提示しているだけに、こちらにより力を注ぎ込んでいると言える。エルンスト・H・ゴンブリッジの美術書の古典『美術の物語』(1950年)の引用が象徴的だ。著者がこの著書を通して批判的に指摘したのは、西欧中心主義、男性・白人優位主義、つまりは女性の不在である。著者は、こうした不平等や差別の視点を梃子にして、現代アートが20世紀末あたりから被抑圧者や被搾取者という声なき声の発掘、またアジア・アフリカへの領野の拡大などに焦点を合わせるようになってきたこと、すなわち

社会的、政治的変革への問題意識を強く押し出してきたことを、障がい者、ジェンダー、人種差別、ポストコロニアリズム分野などの理論的著作に依拠しながら、新生の道を模索してきたことを明らかにする。

その点で著者の固有な視点を感じることもできるのは、現代アートを「ケア」概念と連携づけたところだろう。アート制作においては、すでに制作において個人を絶対的規律とするのではなく、「ケア」の中核概念である「互恵性」の概念に依拠し、それを「集合・共同」概念に置き換えながら、分断・対立を超える準拠点を見出し、社会的に有用なアートとしてその拠り所を取り戻そうとする。本書には制作者、作品、鑑賞者が相互に協力し、手に取りやすいアートとしてのステイタスを取り戻す事例がいくつも報告されている。

本書は作家や作品を個別的に批評、解釈するわけではない。主眼は、現在アートが何に挑戦してきたのか、しているのかを探ろうとしている点にある。講義の体裁ゆえに語り口は平易であり、論旨は明快である。現代アートの歴史的正当性および現状認識をしっかりと把握するのにうってつけである。

さらに、アートと市場価値との関係の問題にも触れないわけにはいかない。アートが価格に踊らされる資本主義経済システムに掠め取られない一つの方策が、かぼそいながらも具体的に提示されている。

また本書末には、現在精力的にアート制作活動にいそしんでいる複数の作家とのインタビューと入門書から専門書まで紹介した文献リストが収録されている。現代アートをもっと深掘りしたい人は参考になるだろう。

瀬戸内国際芸術祭であれ、越後妻有大地の芸術祭であれ、本書の第二の特徴を実感できる作品が目白押しである。その際は本書を有効に役立ててほしい。

127

関本 英太郎